

65

國地小學校

団地小学校

三浦朱門



新潮社版



だんちしょうがっこう
団地小学校

昭和四十八年一月十日 印刷
昭和四十八年一月十五日 発行

定価 五五〇円

著者 三浦朱門

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一二二番(大代
振替 東京 八〇八 番

〔乱丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします。〕

印刷 株式会社金羊社

製本 神田加藤製本

© 1973 by Shumon Miura Printed in Japan.

目次

第一章 暴力事件

5

第二章 文化祭

40

第三章 志望校

105

第四章 進学・結婚

155

カ装
ット幀

お
お
ば
比
呂
司

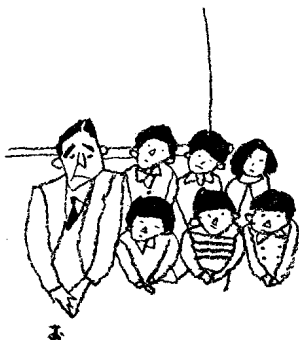
团地小学校

第一章 暴力事件

第一章 暴力事件

富士ヶ丘小学校六年生の土方正彦は団地の子が大嫌いだった。彼らは正彦のことを、ドカタと呼ぶのである。司馬遼太郎という偉い小説家が新選組の副隊長、土方歳三のことを書いたから、彼の姓をヒジカタと読むことくらい、もっと多くの人に知っていてもらいたいと思うのだが、同級生たちはわざと彼をドカタと呼ぶ。女の子までドカタ君と呼ぶ。

一時そんな風に呼ばれても返事をしなかった時代もあったのだが、そんなことをしていると、同級生との交際がなくなってしまうので、またドカタと呼ばれても答えるようになった。それでも、遠足なんかに行って、一般の人もある電車の中などで、ドカタ、ドカタと呼ばれると、頭にくることがある。正彦にとって心外なのは、同級生たちは、彼がそんな思いをしていることに気がつかないらしいことなのだ。彼をドカタと呼びはじめたのは団地の子たちだ。昔からこの土地にいた人なら、村野、土方などという姓は尊敬すべき名前だということを知っていて、読み方を



間違える訳がない。

ドカタ、という呼び方は、背広を着て東京の事務所で働く人々——彼らが団地の住民なのだ——の正彦たち農家の人間に対する輕蔑をあらわに表現するものと彼には感じられる。

「ヒジカタ・トシゾウは家の親類なんだぞ」

と言ったこともあったのだが、同級生に笑われてしまった。

「親類というのはさ、おじさん、おばさん、それからいとこなんての親類だけだよ」

「それから、田舎のおじいさんくらいもまあ親類だよな」

「親類に悪い人がいてもその人の恥じゃないけれど、偉い人がいたところで、自慢できることではないと思う」

「親類ならさ、どういう関係なんだよ。言ってみろよ……」

そう言われると正彦はグッとつまってしまふ。多摩川の流域には土方とか秋元とかいう姓が時々あって、珍しい姓だから、何百年か前に共通の先祖から別れたものだろうとは思ふものの、その証明はできない。

同級生の大半は団地か、最近この附近に家を建てて移ってきた人々の子供で、正彦のような土地っ子はごく少ない。そして土地っ子たちは生れた時は農家の子だったのだが、今ではほとんどの家が農業なんかやっていない。たとえば正彦の祖父は七十になってもまだ三百坪ほど野菜を作っているが、それは道楽でしかない。

正彦の祖父の正吉は昔は小作人であった。農家の次男に生れた正吉は本家から三反の麦畑を借

り、それだけではとてもやってゆけないから、大地主の秋元さんから、雑木林だった山を一町歩ばかり借りて、そこでイモや麦を作った。丁度、戦争がはじまるころで食糧増産が国の方針だったから、林を畑にするについては、国の保護もあったのだ。それでも米が一粒もとれなかったから、農家としては苦しい生活だった。

それが戦後の農地解放で、借りていた土地が安く払い下げられた。それでも生活は苦しく、正彦の父は農業を嫌って、バスの運転手になった。それが今から十年ばかり前、丘の上に団地が建ち、私鉄が近くまで延びてくることになってから、土地が値上りして、土方家は億万長者になり、正彦の父はバス会社をやめ、信用金庫に出資する事業家になり、家も立派な邸宅にかわった。それなのに、同級生たちはドカタ、ドカタと呼びつけにするのだ。

「なーに、ヤツラ貧乏だからヤキモチ焼いてるのさ」

と正夫おじさんは言う。正夫おじさんは高校を出て就職したのだが、家が金持になってからは勤めをやめてイギリスのスポーツカーを乗り廻している。時々縁談があるのだが学習院か一流女子大出の娘としかつきあわないのだそうで、三十すぎてもまだ独身である。

「東大、一橋出てるったってよ。鶏小屋みたいな団地や社宅にはいつてよ、月給十万もとってりや、ましな方じゃねえかよ」

おじさんは、酔っ払うとそんなことを言うのだが、確かにおじいさんが死ねばおじさんだって、一億近い財産がころがりこむ。おじいさんはおじさんがそんなことを言うのと、悲しそうに首を振って、席を立ててしまふ。いつか正彦におじいさんはこう言ったことがある。

「お前のおとうちゃんも、正夫も大学にやってやりたかったんだが、そのころはウチは貧乏だったからなあ。正彦は大学へ行けよ」

正彦は大学へ行くことは反対ではなかったが勉強は嫌いだった。大学を出てないとカッコわるいとは思ったが、本当は正夫おじさんみたいに、スポーツカーに乗って、街道ぞいにできたドライブインやスナックで女の子と友達になって、やはり街道ぞいのボウリング場に行ったり、都心へ遊びに行ったりする方がのんきでいいと思っていた。

しかし最近、正彦がやはり一流大学へ行こうと思いなおしたのは、雨宮節子が転校して同じ組にはいつてきたためである。彼女も団地人種ではあるが厳密には団地からすこし離れて建っている住井物産の社宅に住んでいる。彼女はこの九月に西独のデュッセルドルフの日本人小学校から転校してきたのだ。だから着る物などもすべてドイツ製で、それだけでも充分目立った。ドイツの服はキリッとした素朴なデザインのものが多いが、ややもすると制服のように堅苦しくなるのをさけるために、襟などに刺繻ししゅうがしてある。

節子は髪をお下げにして、その端にリボンを結んでいた。それがドイツ風というのかどうか正彦は知らないが、そのヘアスタイルが色白で目の大きな節子によく似あった。彼女は転校したてで友達がない。いやそればかりではなく、遊び方が違うのか、同級の女の子たちと一緒にならずに、一人ぼっちでいることが多かった。

節子に較べると団地グループのおしゃべりの女の子たちは下品に見える。住井の社宅はこの附近にある団地、社宅の中でも群を抜いて設備がよく、マンション並みだという評判があつて、そ

のせいか団地の女の子たちは意識的に節子をボイコットしているような所もある。団地の子たちは正彦をドカタ、ドカタと差別するだけでなく、社宅の子供たちも、その会社や建物で微妙な格付けをして、バカにしたり、敬遠したりするのだ。

だからクラスの中で少数野党に属する正彦と節子が口をききあうようになったのは当然であつたかもしれない。

近ごろ公害がひどいと言われても、正彦の家のあたりでは秋になると、昔の武蔵野の空気がよみがえる日がある。正彦は勿論、昔の武蔵野など知りはない。しかしそんな日は彼だつて紅葉を見たり、植込みの奥のひんやりして湿った空気を吸ってみたくなる。

ある日曜日、そんなしみじみした秋の日があつて、夕方、祖父が火をつけた落葉の山の煙においをかいでいたら、節子を通りかかった。

「あら、ヒジカタさんの家ここ？」

彼女はちょっと意外そうに櫟けいぎの木の向うの二階建の家を見た。

「うん」

正彦はちょっと得意だった。敷地が六百坪ある。そしてその中央に上下あわせて八十坪ほどの家が建っている。この附近では堂々たる邸宅である。

「ヒジカタ君の家、地主だったの？」

「うん。団地の一部、それから、その下の建売住宅の土地や、駅前の商店街のあたりにもうちの地所があつたんだ」

「そう、大きな家っていいわね。あたしんとも成城に五百坪くらいの土地と家があるんだけど、そこは今、アルゼンチンの人に貸していて、来年まで空かないの。それまでというんで社宅にいるんだけど、狭くて不便だわ」

そんなことから、正彦は節子と口をきくようになった。次の日の月曜日の休み時間は、ほとんど節子とばかり、しゃべって暮した。というよりも、節子からドイツの話を聞いたのだった。火曜日もそうだった。水曜日には正彦は節子の家に招かれた。

節子の家の家具はどれもドッシリしていた。大きな椅子があつて、それに坐ると体がフワッと沈むのだ。

「それは、本物の皮ばりよ。ビニールじゃないのよ」

と節子が教えてくれた。電気スタンドはチェコの製品だった。ガラスの器もチェコやベルギー製だった。オーストリアの田舎の民家で譲ってもらったという石油ランプ、イタリアの若い画家が画いたという絵。そして本棚の本の半分は日本語ではなかった。一番大きな赤い本を抜き出してでたらめに開いたら、裸の女の絵が頁一杯に印刷されていて、正彦はあわてて本を閉じた。しかし節子はそういう絵を見ても、すこしもまごついた顔はしないのだった。

そこで節子の母という人に会った。洋装しているのは当り前としても、家にいるというのに、ナイロンの靴下に、靴まではいっていた。正彦も靴のまま上らされたのだが、絨毯じゅうたんの上に上ってみると、磨いていない泥だらけの靴がいかにもみっともなく、彼はそれだけで肩身のせまい思いをした。

木曜日に学校へ行つて、節子に会つて話しかけると、意外なことに、節子はつとそっぽを向いて答えなかった。聞えなかったのかと思つて、もう一度声をかけたが同じことだった。何か昨日の訪問で重大な失敗をしたのかと考へてみたが、思い当ることはない。とうとう、その日、節子は一言も口をきいてくれなかった。

金曜日は雨で、朝から秋雨が降り、休み時間も教室にいたのだが、節子は自分の席で本を讀んでいて、正彦の方を見もしなかった。学校の帰りに、坂を降りてゆく節子のエンジ色の傘を見つけると、正彦はその後を追つた。団地を抜けて、友達が散り散りになって、節子の傘しか見えなくなると、正彦は声をかけた。

「雨宮さん」

節子はクルリと振り返つたが、立ち止らずに、正彦を見たまゝ、後退りで歩き続けた。

「雨宮さん、何怒つてんだ」

「怒つてなんかいらないわ。皆があなたのことをドカタと呼んでいる理由がわかつたのよ。水曜日、あなたが帰つてから、ママが土方さんは本当の地主じゃないと言ひだして、同級生の家に電話して、あなたと仲よくしちゃいけない、とおっしゃつたの」

「……………」

「地主といつても、農地解放前は小作だつたんでしょ。土地ブームの成金だつて、皆が教えてくれたわ。うちの知りあいには、そういう人っていないの」

正彦は自分の顔が青くなるのがわかつた。次の瞬間、彼は節子を水たまりの上に突きたおし、

茶色の水を彼女にひっかけてやった。そして彼は傘もささずに、顔を雨と涙でビショビショに濡らしながら、家まで走って帰った。そして何が何でも東大か慶応大学を卒業して住井商事の社員になってやろうと思った。

六年二組を受持っている田北健は、職員会議が終ってから、これはどうしても美術担当の坂口先生と決着をつけないければ、と思った。

その日職員会議の議題の一つに、文化祭の件があった。これは問題の性格から、教務主任の吉川健先生、美術の坂口美美子先生、音楽の谷口裕一先生が小委員会を作って、企画してきた案を、職員会議で練り、校長の裁決を受ける、という形になる。

小委員会を代表して吉川から昨年と変りばえのない案が説明された。教室では生徒の絵、工作、共同調査を展示し、講堂では音楽、演劇などをやる。日は十一月中旬、あるいは下旬の日曜。また、勤労感謝の日にやるのもよい。

教頭の木室が、

「まあ、内容については、今さら問題もないと思いますが。日は、どうでしょう、勤労感謝の日、というのは」

と教員たちの関心を文化祭の内容ではなく日時の問題だけに限定しようとする発言をした時に、坂口が手をあげたのだった。

「小委員会に参加した一人として、少数意見を申しあげようと思います」

少数意見といったって、小委員会そのものは三人なのだから、つまり彼女一人の意見ということになる。委員会の責任者の吉川さんはそろそろ教頭になる年だし、文化祭を特に盛り上げようという気などある訳がない。音楽の谷口は五十近い男で、専科教員にありがちな、教員の仕事はパンのため、生活のハリは家に帰ってから、といったタイプの人で、学校では何一つ主張せず、いつも多数意見に賛成の挙手をする。

つまり三人の委員会といっても、実際問題としては、吉川が原案を作り、谷口がそれに賛成し、坂口が何を言おうとも、全く取りあげられない、ということになる。

田北は二十七歳だから、校長、教頭、教務主任という四十、五十の男たちが学校を運営していくやり方には、全くうんざりしている。たとえば吉川をはじめ、校長も教頭も、文化祭というのが、教育上どういう意味があるか、ということなど、もう考えようもしない。そのくせ、やめようという気にもならず、去年までやってきたのだから、今年もやろうというだけのことだ。だから田北がもしこの小委員会にはいたら、やはり少数意見を言う側になるだろう。だからといって、彼が二十四歳の坂口美美子の意見に全部賛成とは言えない。

彼女は教師にしては、服装や化粧が派手すぎるのだ。勿論、ホットパンツにトンボメガネで街を歩く女の先生もいるのだが、登校する時は、ずっとおとなしい服装をしてくる。しかし、坂口先生は街を歩き廻っている服で登校する。現に今の服が超ミニなのだ。これは六年生の受持としては困ることがある。この間も、教室の外の学級花壇の手入れをしていたら、そんな近くに受持の田北がいるとも知らないで、教室の中で論争しているのが聞えたのである。

「バカいえ。ありや、ピンクじゃないよ、サーモンピンクってんだよ」

「ちがわい。オールド・ローズってんだよ」

最初、何の話かと思つたが、すぐ坂口先生のパンティの色だということがわかった。

「お前、本当に見たんかよ」

「見たさ。粘土のはいったバケツを持ち上げようとしている所、後ろからのぞいちゃった」

「エッチ、悪いの、悪いの」

「レースがついてやんのさ」

「ワー」

それきり男の子たちは教室の外へ走り出した様子だった。田北はそれを苦い顔で聞いていた。そういう現場を見つけて叱るのも考えものである。小学校六年というのはデリケートな年だ。早い子は男も女も「春の目覚め」を経験している。しかもそれを大人のように上手に処理することはできない。同時にあと半年足らずのうちに、私立志望者は中学の入学試験を受けなければならない。

熱心な親は逆上してヒステリー気味だし、それが子供の心にも投影して、神経質になっている。先生のパンティの色などというエロ話は、勉強に追われている彼らにとって、息抜きかもしれないが、かといって先生が何も生徒に性的なサービスをすることはないのである。

坂口美美子が少数意見として職員会議で言ったことは文化祭を四日間にわたって行うという案